福井県埋蔵文化財調査報告　第116集

下 市 古 墳

― 一般県道殿下福井線道路改良工事に伴う調査 ―

2010

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序　　文

このたび、道路改良工事（一般県道殿下福井線）に伴って、福井市下市町地係において、平成19年度に発掘調査を実施しました下市古墳の調査成果がまとまり、報告書として刊行することとなりました。

下市古墳の位置する與須奈神社は、式内社として古代より続く格式のある社です。また、その地は日野川と足羽川の合流点を見下ろす要衝として、古より重要な地点であったと思われます。しかし、この地域は、発掘調査も少なく、まだまだ不明なことが多くあります。

今回発掘を実施した下市古墳も、古墳として遺跡登録されてはいましたが、実態は不明でした。今回の調査は小規模なものでしたが、古墳の築造時期などの情報を得ることができたと共に、與須奈神社の創立に関わると考えられる新たな事実も確認されるなどの成果をあげることが出来ました。幸いにも古墳は一部を破壊されるにとどまっており、今後とも保存されていくことが期待されます。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大なご支援とご協力を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。

平成22年３月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所　長　吉　岡　泰　英

例　　言

1　本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが道路改良工事（一般県道殿下福井線）に伴い、平成19年度に実施した下市古墳（福井県福井市下市町37－36所在）の発掘調査報告書である。

2　下市古墳の調査は、福井県福井土木事務所地域整備第１課の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、主査宮崎認、嘱託職員岩田直樹が担当した。

3　発掘調査は、平成19年９月10日から平成19年10月５日まで実施した。出土遺物の整理作業は、平成20年４月１日から平成22年３月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。

4　本書の編集は宮崎があたり、主査田中勝之と分担して執筆した。なお、執筆の分担は以下の通りである。

　田中　第４章第２節　　宮崎　それ以外すべて

5　下市古墳に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。

6　検出遺構、出土遺物の図化は、宮崎と田中が、写真撮影は宮崎が行った。

7　本書に掲載した地形図および遺構図は、株式会社ジビルに委託して作成したものを一部改変して使用した。

8　遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符合する。写真の縮尺は不同である。

9　本書における水平レベルの表示は海抜高（Ｔ．Ｐ．　ｍ）を示し、方位はすべて座標北を用いた。

また、Ｘ・Ｙ座標値は、国土方眼座標系Ⅵ系に基づく。

10　本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。

11　発掘調査ならびに本書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご教示を頂いた（五十音順・敬称略）。

　田邊朋宏　水野和雄

12　発掘調査には、地元の方々の参加・ご協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

目　　次

第１章　調査の経緯 …… 1
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 2

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 5
第１節　地理的環境 …… 5
第２節　歴史的環境 …… 6

第３章　遺 構 …… 9
第１節　墳丘および周溝 …… 9
第２節　その他の遺構 …… 10

第４章　遺 物 …… 12
第１節　土器・土製品 …… 12
第２節　石器 …… 14

第５章　まとめ …… 15

写真図版目次

図版第１　遺跡　（１）古墳遠景（南東より）
（２）調査前全景（西より）
図版第２　遺構　（１）周溝内堆積状況（西より）
（２）墳丘および周溝堆積状況（西より）
図版第３　遺構　（１）ＳＫ１土層堆積状況（南東より）
（２）墳丘および周溝（西より）
図版第４　遺構　（１）墳丘および周溝（南西より）
（２）墳丘断ち割り状況（西より）
図版第５　遺物　（１）須恵器・土師器
（２）甑
図版第６　遺物　（１）塼仏（表面）
（２）塼仏（裏面）
（３）打製石斧・剥片

挿　図　目　次

第１図　工事範囲図 …… 1
第２図　調査区およびグリッド配置図 …… 3
第３図　本古墳の位置と福井平野の地形図 …… 5
第４図　下市古墳周辺の遺跡分布図 …… 7
第５図　下市古墳測量図 …… 9
第６図　墳丘および周溝土層図 ……10
第７図　ピットおよび土坑土層図 ……11
第８図　土器実測図 ……13
第９図　土製品実測図 ……14
第10図　石器実測図 ……14
第11図　下市古墳復元図 ……15

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧 …… 7

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

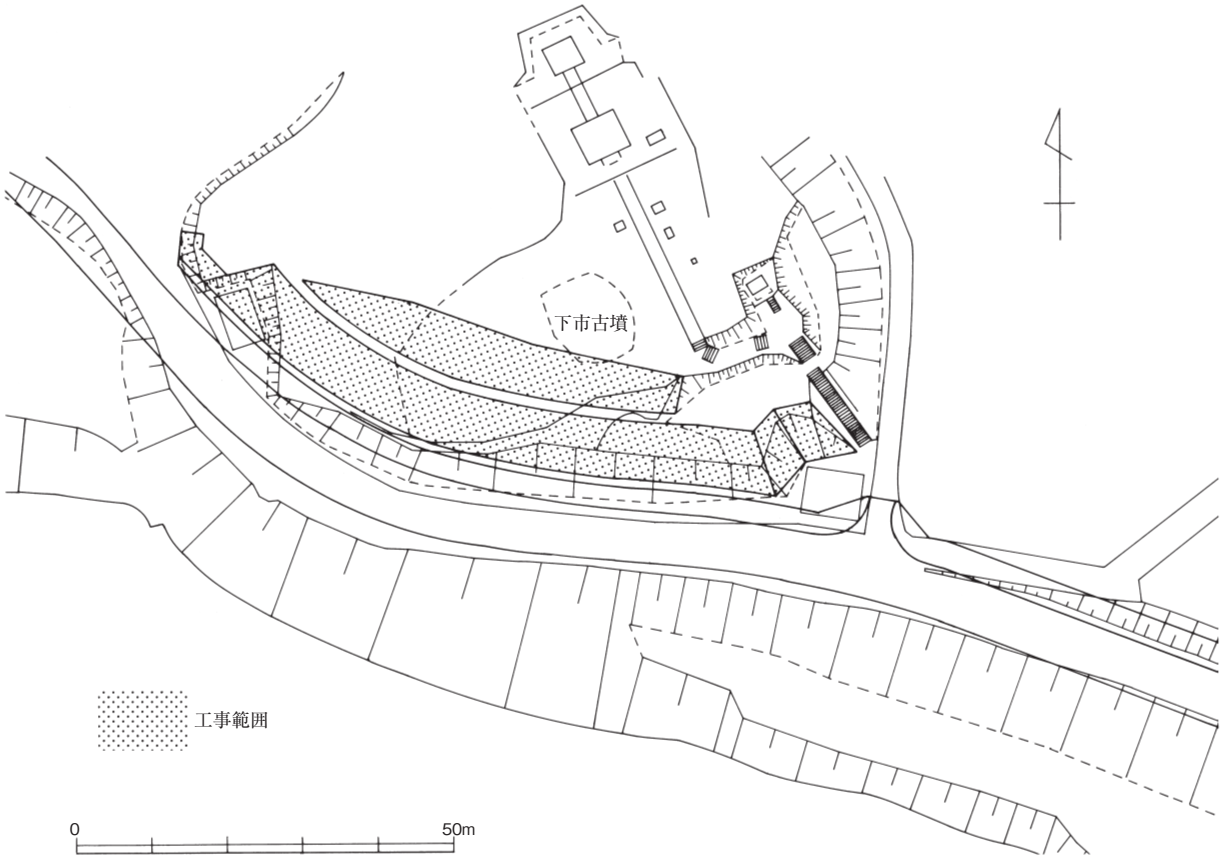
福井平野の南西端部は、丹生山地から派生する低丘陵の間際で、日野川、足羽川が合流し、沖積地がほとんど存在しない狭隘な地形である。いわば山塊の前に川が流れており、山裾が生活の場である。

日野川左岸には、県道115号（殿下福井線）が整備されており、福井市中心部へのアクセス道路として重要な意味を持つ。この県道は、先述のような河川と低丘陵の間を地形に沿って整備されており、従来、落石や急カーブが多い道であった。下市古墳が位置する與須奈神社も、丹生山地から派生する低丘陵の先端に位置しており、眼前には日野川が流れる。県道はこの神社直下で、日野川と尾根の隙間を走っており、尾根の形に沿って大きく蛇行していた。

以上のような状況から、福井県福井土木事務所による道路改良工事が計画された。工事計画によると、神社のある尾根を境内である上部平坦面より掘削し、県道を直進させるものであった（第１図）。この神社境内には、平成５年刊行の『福井県遺跡地図』で周知されている下市古墳が存在する。現在も墳丘の高まりが確認でき、保存状態は良好である。工事計画は、この古墳の墳丘を一部切断するものであった。

福井土木事務所と福井県教育庁文化課・埋蔵文化財調査センターの協議の結果、道路計画上、この古墳の破壊を回避することは不可能となった。このため、平成18年度に試掘調査を行うこととなった。

平成18年10月３日に行った試掘調査の結果、本古墳にはあらたに周溝が伴うことが確認され、墳丘および周溝の破壊は免れえず、本格調査が必要と判断された。再協議の結果、道路改良工事の進捗のあわせて、平成19年度から本格調査を開始することとなった。本格調査必要面積は70㎡である。



第１図　工事範囲図（縮尺1/1,000）

第２節　調査の経過

発掘調査は、平成19年９月10日より着手した。発掘調査地は、式内社與須奈神社の境内であり、周囲に竹薮も散在するため、薮蚊が多く、また、残暑が厳しい中での調査開始であった。しかし、現在も大切にされている神社であるため、清掃は定期的に行われており、古墳の高まりに下草や、低潅木が生えている程度であった。

古墳のある境内に至るには、やや不安定な傾斜の石段を昇る以外に方法がないため、人力で撮影用タワー等の発掘器材を運びあげて準備を行った。調査前の状況を記録するため、樹木を傷つけないように、下草のみ伐採し、掘削前の全景撮影を行った。

次に、神社境内に小型バックホーを、大型クレーンで吊り上げ、重機によって調査地の表土掘削を行った。表土中からは、すぐに須恵器や打製石斧が出土した。

また、試掘調査時に不十分であった部分に、試掘トレンチを設定し、重機によって表土を掘削した。その後、人力によって精査を行ったが、他には遺構が確認されなかった。

調査区内全域を精査すると、赤褐色の地山面に、地山土が混ざった褐色シルトで埋まっている周溝の平面形および平成17年度の試掘トレンチ跡が３箇所検出された。また、周溝の外側にピットが存在することも明らかになった。

基本測量によってグリッドを設定した後、掘削を開始した。基本測量は、調査区が狭小で細長い形態であることから、東西にＡ～Ｄラインを５ｍピッチでグリッドを設定し、南北は調査区にあわせて、3.5m幅で１グリッドを設定した（第２図）また、東側は崖面が近接しているため、適宜距離をあわせてグリッド杭を設置した。

掘削は、試掘トレンチ跡を先行して掘削し、その部分を利用して土層観察用のあぜとした。

観察の結果、周溝内の堆積は上下２層に分かれていることが明らかであった。上下２層を区分して慎重に掘削を行った。

掘削開始直後から、上層埋土中より古代の須恵器坏、土師器片が出土した。試掘調査時には、遺物の出土が確認されていなかった。古墳に伴う遺物ではなく、明らかに８世紀代の遺物である。この状況から、古墳が位置する與須奈神社の式内社としての性格も考慮して調査を継続していった。

掘削を進めていくと、周溝内から古墳時代の須恵器片が出土した。状態は良好ではなかったが、有蓋高坏の蓋であることが判明した。古墳に伴うと考えられる遺物の出土は少量であったが、古墳の所属時期が判明したことは大きな成果であった。

周溝埋土を除去すると、墳丘の西側裾部を切り込む形で方形の土坑が確認できた。この土坑は、周溝埋土上面では検出できなかった遺構である。埋土からは古代の土師器片が出土した。神社の遺構であるのかは判断しかねたが、少なくとも神社成立期に、人為的な活動痕跡が確認されたことも大きな成果であった。

さらに掘削を進めると、周溝下層からも、古代の須恵器や土師器の出土が確認でき、古墳の周溝がほんど埋没していない段階から、古墳の周辺、あるいは、古墳を意識してこの尾根上が利用されていることが明らかとなった。また、周溝埋土からは副葬品とおぼしき遺物が確認されないことから、埋葬施設が盗掘されていない可能性があると思われる。

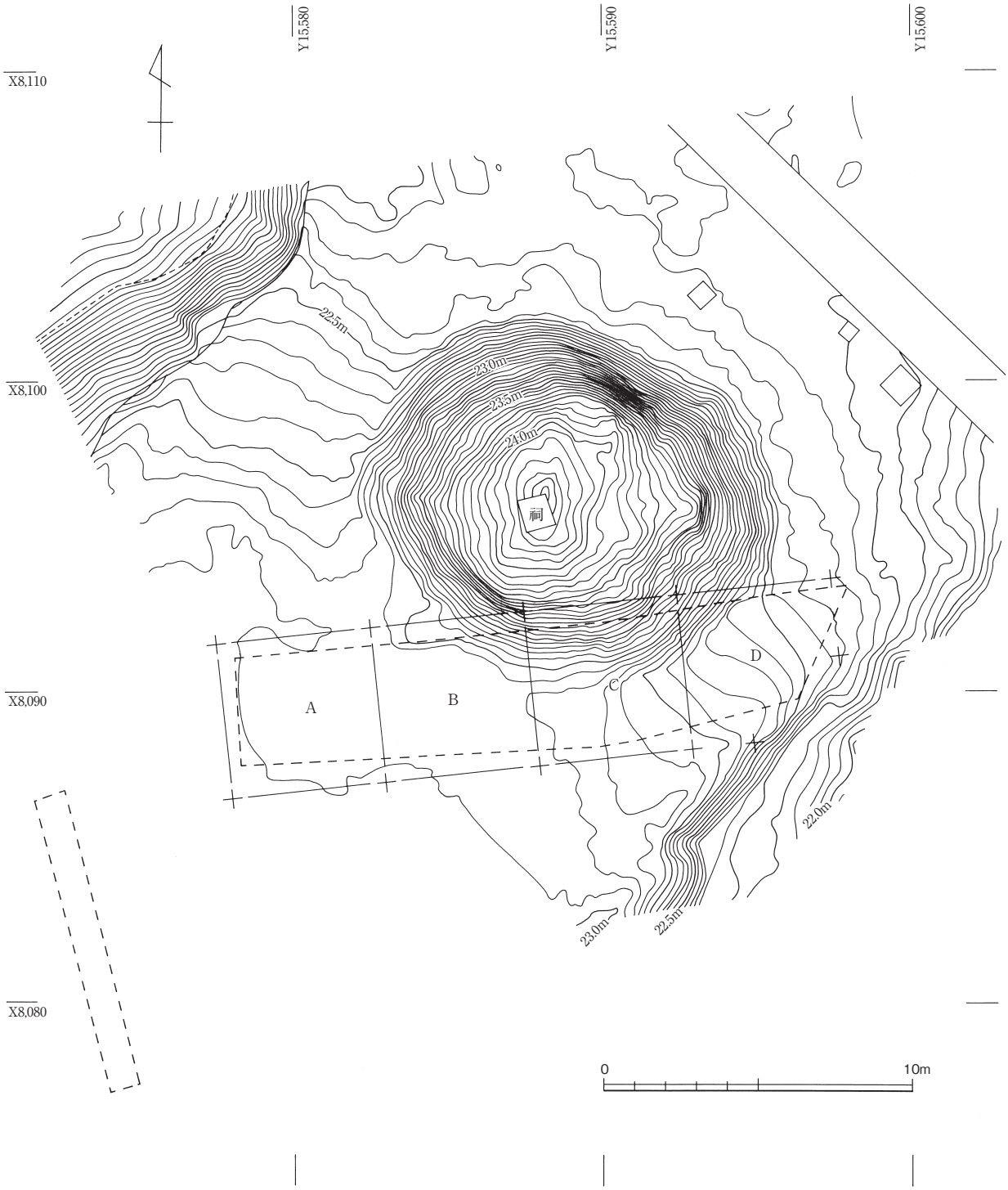
現在、墳丘上には、近世に設置されたと推定される笏谷石製の祠があるが、はっきりとした盗掘坑は発見できない。ただし、墳丘盛土は流失している状況がうかがわれ、埋葬施設の部材と考えられる石材

が部分的に目視により確認できる。

周溝の掘削が終了した後で、土層観察用あぜの写真撮影、および図化作業を行った。次にあぜを撤去し、調査区の完掘状況を全景撮影した。

その後、測量を行った。測量は、調査区の面積が狭小であることや、神社境内上には、電線やNTTの基幹電話線が横断していることから、ラジコンヘリなどによる航空測量は行わず、デジタルカメラを利用したオルソ画像による３次元測量を用いて記録保存を行った。

測量による記録後に、断ち割りによる補足調査を行った。



第２図　調査区およびグリッド配置図（縮尺1/200）

断ち割りは、周溝内の土層あぜと同じ直線上に設定し、最小の範囲で墳丘の一部に断ち割りを行った。同時に、同一直線上で周溝外の地山部分にも断ち割りを行い、地山と盛土などの層位関係を把握した。この部分についても図化作業と写真撮影を行い、記録を保存した。

こうした一連の調査を終了した後、器材の撤収準備を行い、残りの時間を利用して周辺の分布調査を行った。通常、こうした尾根上あるいは山麓の古墳は、あまり単独で存在することはない。特に後期古墳であればなおさらである。

本古墳の位置する尾根は、現在は開発のため独立した状態を呈しているが、本来は北側の安居城が位置する尾根筋と連続していた可能性があった。そこで、安居城までの尾根筋を踏査したところ、破壊されたような円墳状の高まりを１基確認することができた。遺物は確認できなかったが、ほぼ円墳と考えても間違いないと思われる。ただし、この１基以外は確認できなかった。

神社境内については、昭和期に社殿や各社が建て替えられており、他に古墳らしき遺構は、現在のところ確認できない。この点に関して、地元の方々に聞き取りを行ったが、あまりはっきりとしたことは判明しなかった。

最後に、断ち割り部分や安全上必要な範囲を埋め戻し、器材を撤収した10月５日をもって調査を終了した。

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

福井県は本州中央部の凹部に位置し、西側は日本海に面している。東西は約130㎞、南北約100㎞を測り、面積は約4,189㎢を測る。

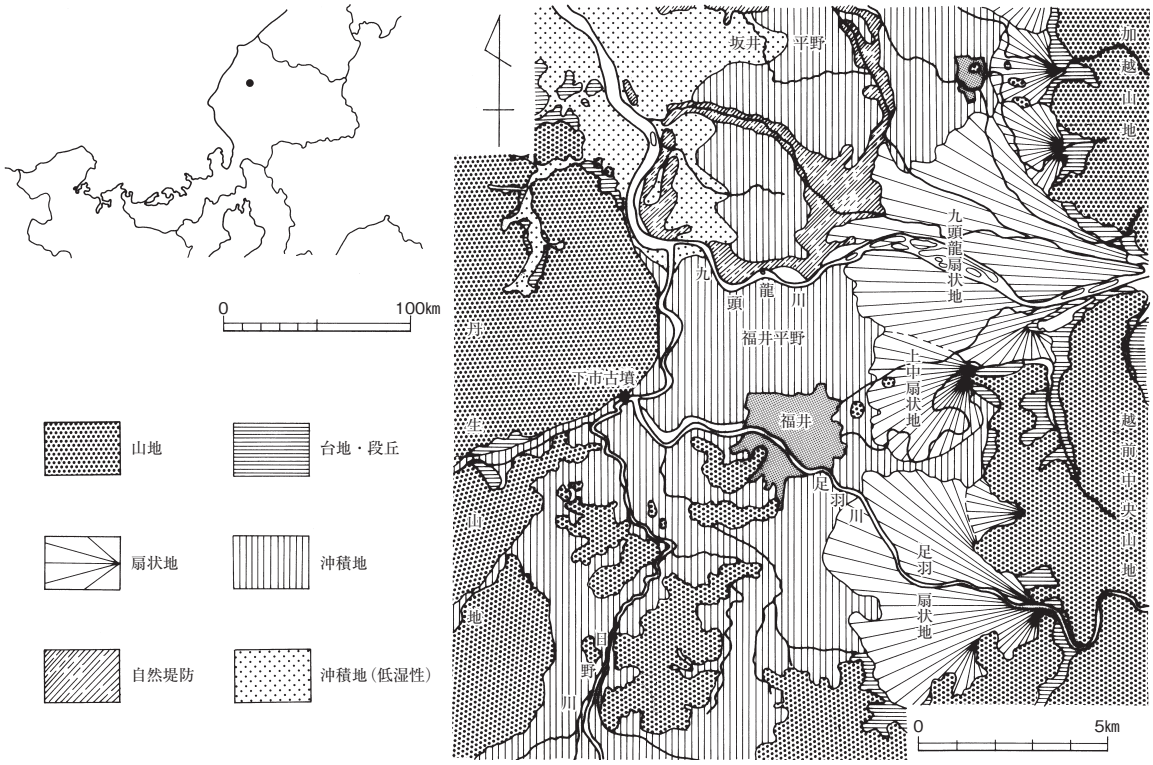
福井県は敦賀市の北東部にある木ノ芽山嶺を境として、行政的には北側を嶺北地方、南側を嶺南地方と呼称する。現在では嶺南地方に含まれている敦賀市から以北を近代以前では越前国、敦賀市を除く嶺南地方を若狭国として区分していた。福井県は、北は加越山地で石川県と、南東は越美山地で岐阜県と接し、南西から西方にかけては野坂山地・若丹山地で滋賀県および京都府と境を接する。

福井県の嶺北地方はあまり凹凸のない海岸線を有するものの、東尋坊や呼鳥門のような切り立った岩肌が連なり、奇岩の景勝地として知られる。一方、嶺南地方は細くのびる半島が複雑に入り組む、日本海側有数のリアス式海岸を形成している。

嶺北地方は周囲を山地で囲まれ、唯一北西で日本海に面して開く。各山地より流れ出る九頭竜川・足羽川・日野川等の主要な河川は、この開口部に向かって集まる。これらの主要河川の堆積物によって形成されたのが、北陸地方有数の穀倉地帯である福井平野である。

越前中央山地と丹生山地に挟まれた沖積平野を広義の福井平野とするならば、福井平野は以下の３つの地域に分けることができる。九頭竜川以北の兵庫川・竹田川によって形成された坂井平野、九頭竜川以南の足羽川・日野川によって形成され、三方丘陵・文殊山等によって南側を地峡部で画された狭義の福井平野、そして地峡部以南の鯖江市・越前市を中心とした南越盆地に分けられる。

このうち越前中央山地西側に広がる狭義の福井平野は、北辺を九頭竜川に、西・南辺を丹生山地および丹生山地から派生した低丘陵群に画された、東西約９㎞、南北約11㎞の区域をさす（第３図）。



第３図　本古墳の位置と福井平野の地形図（縮尺1/4,000,000、1/200,000）

この福井平野の地形は、大きく東西に２分できる。福井平野は越前中央山地と丹生山地間に生じた、福井断層を軸とする凹地が河川堆積物により埋積された地形であり、その埋積量は福井市街地で約100mにも及ぶ。平野北辺を流れる九頭竜川には、平野南方から日野川が、また平野東方からは足羽川がそれぞれ流入し、平野北西端で合流している。これら主要３河川の埋積作用が平野形成の主因となっている。この埋積地形は平野西半部で特に顕著であり、低湿な沖積地となっている。これに対し、平野東半部は、越前中央山地側より流入する九頭竜・足羽の両川が形成した、九頭竜扇状地・足羽扇状地と呼ばれる、大規模な扇状地が占めており、その扇端は標高約10m付近にまで及んでいる。なお、平野南縁には扇状地の形成は無く、丹生山地より派生した独立丘陵群が、丘麓を埋積平野中に沈めて散在している。

以上が本古墳の位置する、福井平野の地理的概況である。

再度、本古墳の立地を微視的に見ておくと、古墳は、狭義の福井平野の西縁部、丹生山地の東麓から派生する支尾根の先端に位置する。この尾根は、日野川に接するように突出しており、日野川と足羽川の合流点である漆ヶ淵を見下ろすことができる。日野川左岸の地理的環境は、丹生山地と河川の間にきわめて狭い沖積平野が存在し、所々にこうした尾根や低丘陵がせり出す地形が特徴である。

第２節　歴史的環境

前節のような地理的環境では、生産的な生活活動には不向きな点が多い。しかしながら、河川の合流点に位置するため、交通・運搬の観点からは重要な地域であり、学史上、有名な遺跡が確認されている。

下市古墳の位置する福井平野西縁部では、沖積平野および山麓部に立地する貝塚・集落遺跡のほか、山地・丘陵上に立地する古墳群・寺院跡・城館跡などがある。歴史順にこれらの遺跡の概略をまとめておく（第４図、第１表）。

現在までのところ、本古墳の周辺には旧石器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代早期以降の遺跡から調査が行われている。

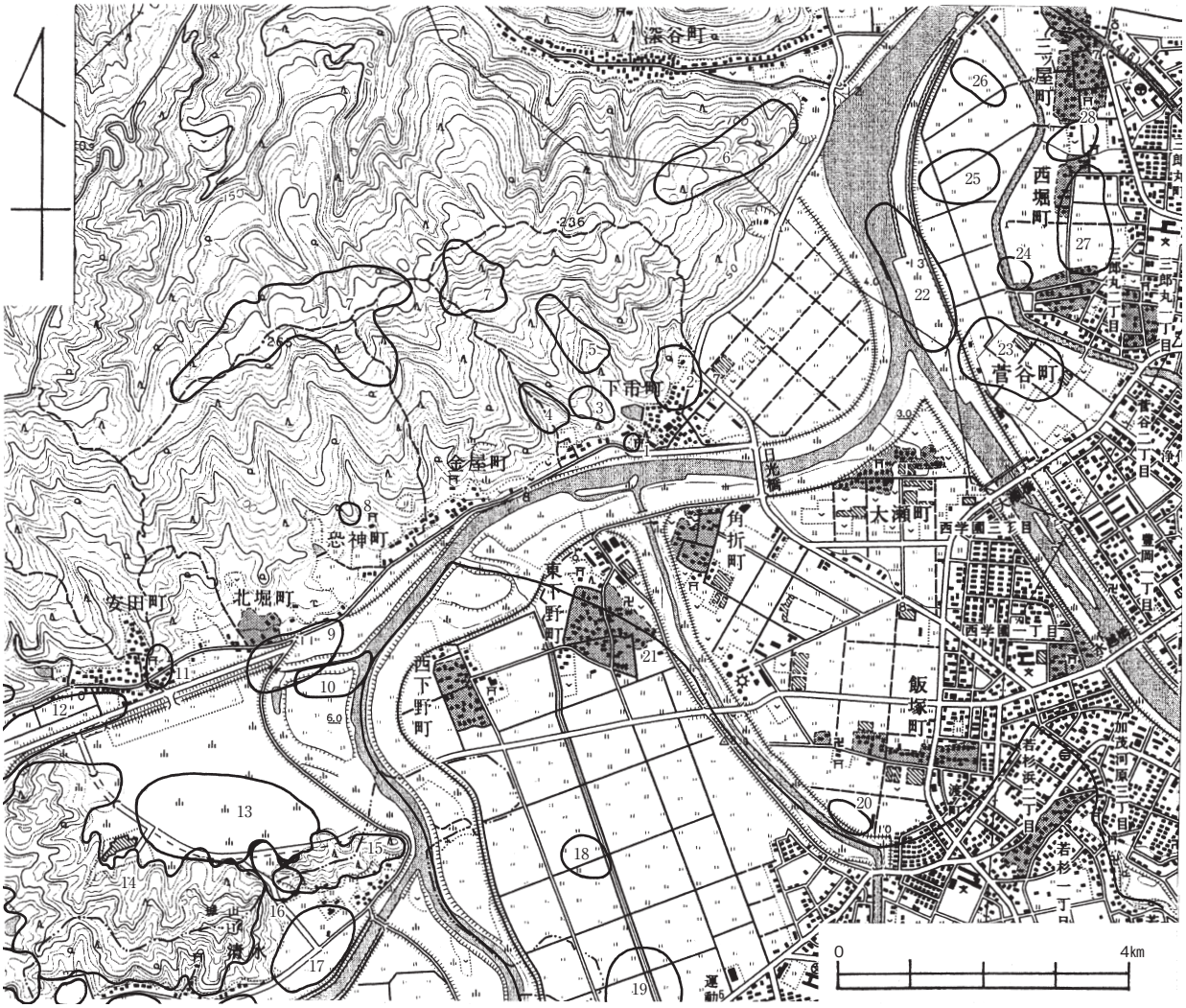
北堀貝塚（第４図９・10）　福井市北堀町に位置する。縄文時代早期末から前期の貝塚・集落遺跡である。大正２年という古い時期から遺跡として報告されており、学史上重要な意味を持ち、また、埋蔵文化財保存についても問題があった遺跡である。昭和61年から５次にわたり、県埋文センターが調査を行った。これにより、貝塚部分と集落部分の遺跡範囲がおおよそ確認され、北陸を含めた日本海側で屈指の規模を誇る貝塚・集落遺跡であることが明らかとなった。県指定史跡として登録されている。

弥生時代の遺跡では、日野川左岸には大規模な遺跡は確認されていない。右岸に、近年調査が行われた遺跡が１例存在する。

菅谷烏帽子遺跡（第４図22）　福井市菅谷町に位置する。弥生時代中期の集落と、奈良時代東大寺鳴野荘関連の複合遺跡である。平成５・６年、平成17・18年に県埋文センターが調査を行った。弥生時代の遺構としては、土壙墓８基が確認されている。玉作り関係の遺物も出土したが、住居などは確認されていない。多数の掘立柱建物が検出されたが、ほぼすべて奈良時代に帰属するものと考えられる。

古墳時代の集落遺跡は現在までのところ調査例が存在しない。古墳については、調査例は少ないものの多数存在が確認されている。

安田古墳群（第４図11）　福井市安田町に位置する。標高約10mを測る低丘陵上に立地する。昭和10年の道路拡幅時に遺物が出土し、存在が判明した。円墳２基以上が存在したものと考えられるが、詳細は不明である。残された遺物からは、古墳時代後期の構築と考えられる。



第４図　下市古墳周辺の遺跡分布図（縮尺1/25,000）

第１表　周辺の遺跡一覧（番号は第４図に対応）

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	下市古墳	古墳	古墳	15	清水古墳群	古墳	古墳
2	大瀬仙光坊館	館跡	中世	16	尾高山城	城跡	中世・近世
3	安居城	城跡	中世	17	清水尻浜遺跡	散布地	縄文～近世
4	弘祥寺跡	寺院跡	中世	18	東下野遺跡	散布地	
5	タイコウ寺跡	寺院跡	中世	19	久喜津遺跡	散布地	古墳～平安
6	深谷古墳群	古墳	古墳	20	飯塚遺跡	散布地	
7	金屋城	城跡	中世	21	東大寺領道守荘	荘園跡	奈良
8	恐神古墳群	古墳	古墳	22	菅谷烏帽子遺跡	集落	弥生・古代
9	北堀貝塚	貝塚	縄文	23	菅谷西野遺跡	散布地	古墳～近世
10	北堀貝塚（県史跡）	貝塚	縄文	24	三郎丸遺跡	散布地	古墳～中世
11	安田古墳群	古墳	古墳	25	三ッ屋古川遺跡	散布地	奈良～中世
12	安田遺跡	散布地	古墳～中世	26	地蔵堂遺跡	散布地	弥生～近世
13	安田城山前遺跡	散布地	古墳～平安、近世	27	西堀遺跡	散布地	古墳～平安、近世
14	鎗噛山城跡	城跡	中世	28	三ッ屋遺跡	散布地	

深谷古墳群（第４図６）　福井市深谷町に位置する。昭和44年に土砂採取工事より遺物が発見され、届けを受けた福井市教育委員会によって調査が行われた。円墳１基が確認され、横穴式石室の存在も確認された。副葬された須恵器からは、６世紀後半の築造と考えられる。分布調査の結果、現在は方墳７基も確認されており、古墳群として登録されている。

清水古墳群（第４図15）　福井市安田町・細坂町・清水町に位置する。丹生山地より派生する城山を中心とする低丘陵上に位置する。前方後円墳２基を含む総数23基からなる古墳群である。９号墳は前方後円墳で全長52.5mを測り、福井平野西部では最大の首長墳である。古墳の構築時期は４～５世紀と想定されている。

古代の遺跡については、先述の菅谷烏帽子遺跡のほか、東大寺領が存在する。

東大寺領道守荘（第４図21）　福井市東下野町から下江守町など広範囲にまたがり位置する。766年作成と伝えられ、正倉院に残される「越前國足羽郡道守村開田地図」により、荘園の位置などを把握できる。昭和37年以降、数次にわたり発掘調査を実施しているが、明確な遺構検出には至らない。

中世については、城館や寺跡に有名な遺跡が複数存在する。抜粋して紹介する。

安居城（第４図３）　福井市金屋町に位置する。丹生山地東縁の、漆ヶ淵を望む、標高約20mを測る低丘陵上に立地する。「太平記」や「越前国城跡考」などの文献にも記載されており、戦略上の拠点として使用されていた。南北朝期には斯波氏の臣細川出羽守、戦国期には朝倉景健がそれぞれ居城したとされている。現在も、大きな平坦面を備えた郭が確認でき、土塁や門跡が良好に残存している。

大瀬仙光坊館（第４図２）　福井市下市町に位置する。下市古墳の北東に地名を確認できる。朝倉孝景の臣、大瀬仙光坊の居館とされるが、現在、遺構を確認することはできない。

弘祥寺跡（第４図４）　福井市下市町・金屋町に位置する。丹生山地東麓の谷に立地する。朝倉氏の故地とされる寺院で、現在でも平坦面が数段確認できる。土塁等の防御施設は確認できない。

以上のように、本古墳の周辺の歴史的環境は、北堀貝塚をはじめ、重要な遺跡の存在があらためて認められる。また、古墳群も周辺に複数確認されている。しかし、発掘調査によってその詳細が明らかになっている遺跡は数えるほどしかない。古墳については工事による不知発見例も多い。今後の調査の増加によって、より多くの情報を得ることが期待される。

参考文献

日本地誌研究所編『日本地誌』第10巻　1970　二宮書店

『福井県史　資料編13　考古』　1986　福井県

『福井県遺跡地図　―平成４年度―』　1993　福井県教育委員会

『福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報４　北堀貝塚』　1991　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

『福井市史　資料編１　考古』　1990　福井市

第３章　遺構

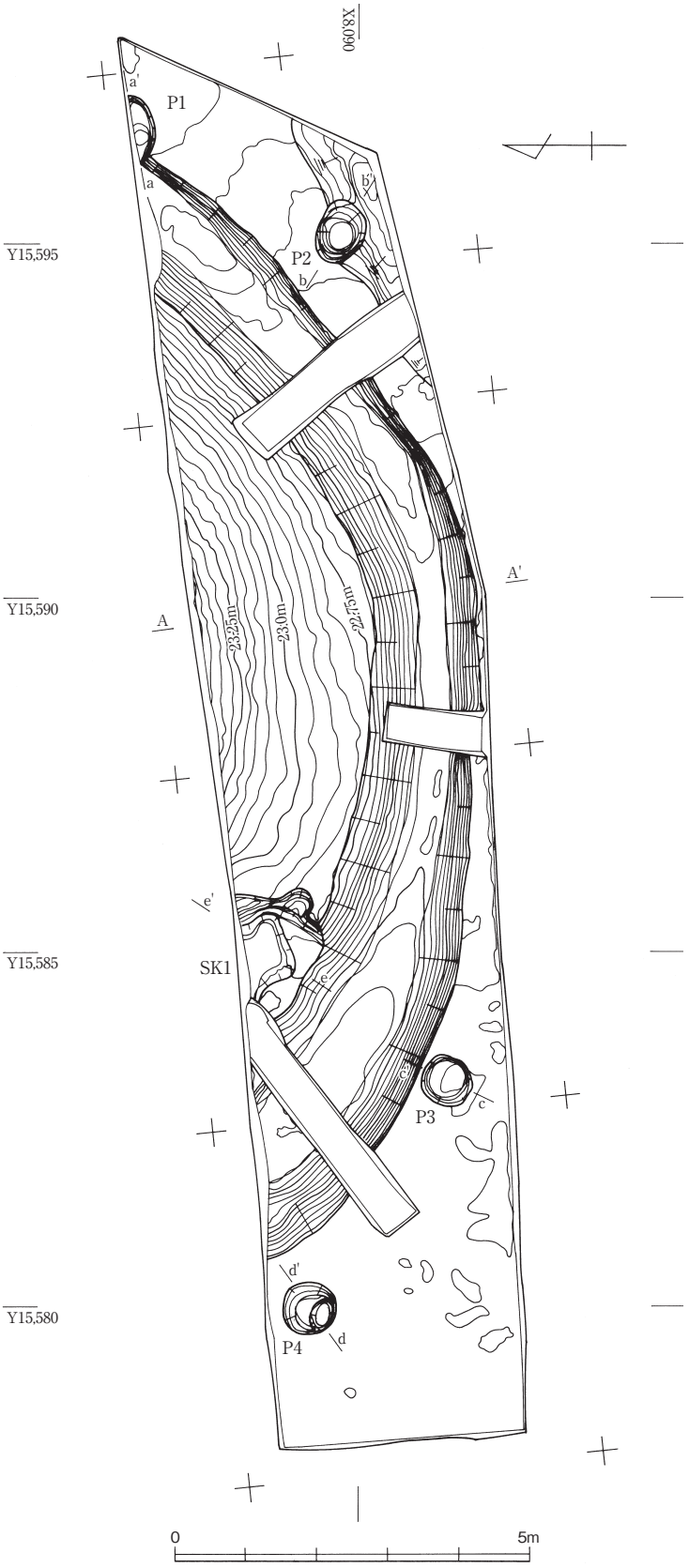
第１節　墳丘および周溝

調査前の状況では、第２図の現況での測量図からもわかるように、墳丘の形態は円墳であることが予測された。

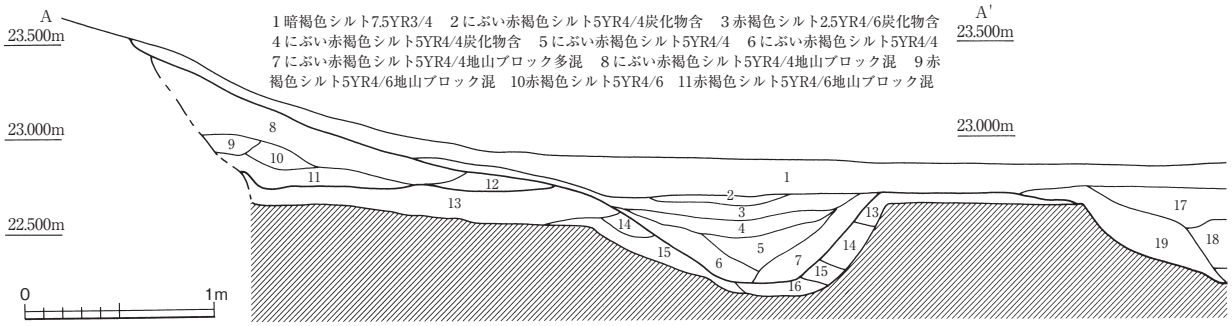
調査の結果、調査範囲内で比較的整った円形の周溝が検出でき、本古墳の墳形は円墳であることが判明した（第５・６図、図版第２～４）。

周溝は、上層はやや黒味のある赤褐色シルト（第６図２～４層）で埋没しており、下層は地山の風化土ブロックが多く混入する赤褐色シルト（第６図５～７層）で埋没していた。特に４層から親指大の炭の塊がまとまって出土している地点も存在し、下層の埋没後、一定の時間を経過した後に上層部分の埋没があったようである。周溝は、調査区内では途切れることなく連続しており、陸橋などの施設や、掘り残し部分は存在しない。その規模は、調査区の東側では、上端幅1.5m、下端幅0.6mを測る。調査区の中央で最小となり、上端幅1.4m、下端幅0.4mを測る。調査区の西側で最大となり、上端幅2.1m、下端幅１mを測る。周溝底は西から東に向かって下降している。調査区の西側で周溝幅が広がっているが、後述するＳＫ１が構築されているように、古代の段階である程度の改変を受けた結果である可能性も否定できない。

墳丘は、標高22.75m付近の高さで基底がそろっており、もともとある程度平坦な部分に古墳が構築されていた様子が窺われた。第６図の土層図でも確認できるように、13層以下が周溝をはさんで内外にほぼ水平に堆積している。



第５図　下市古墳測量図（縮尺1/100）



第６図　墳丘および周溝土層図（縮尺1/40）

対照的に、８～12層は傾斜堆積している様子が観察できる。

つまり、13層上面が墳丘構築面および周溝の掘削面であって、８～12層は墳丘盛土である。通常こうした古墳構築面では整地作業が行われ、旧表土や植生の焼き払い跡が検出される例がある。本古墳においては、そのような痕跡は確認できなかった。

この12層と13層の境が、墳丘と周溝の傾斜変換点に相当し、古墳の基底部を形成している。この基底部で復元した墳丘の復元全長は12.8mである。

周溝は西側で外縁部が外側に膨らむが、調査区中央の最小幅部分で復元すると、外周部分の直径は15.6mとなる。

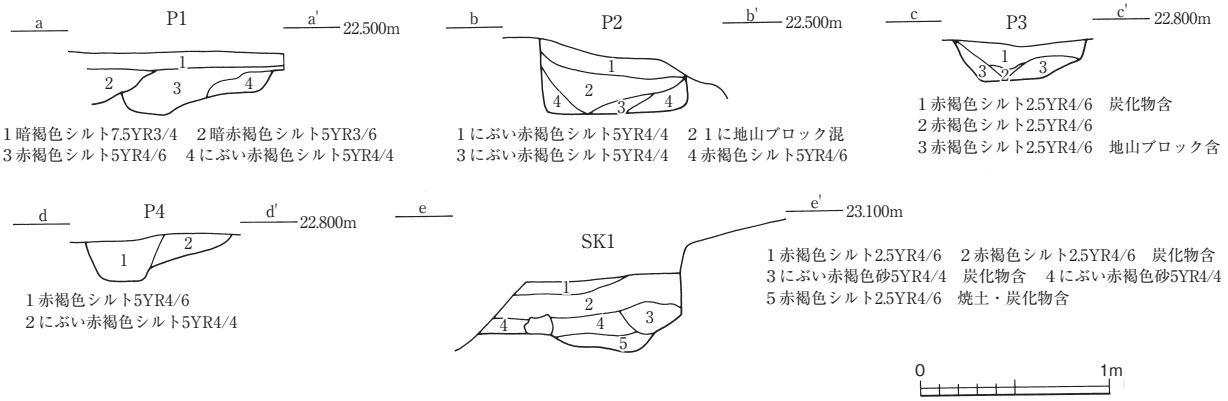
周溝より外側の範囲では、本古墳に付属する遺構は確認できなかった。断ち割りで確認したところ、周溝外縁から1.2m程度の範囲で平坦面が確認できたが、そこから南は斜面となる。調査区の西側には大きな平坦面が広がっているが、試掘トレンチで確認したところ、こちらでも現在の平坦面途中から斜面となることを確認している。本古墳より南側は、旧尾根筋の斜面であり、古墳は漆ヶ淵を見下ろすもっとも見晴らしのよい地点に構築されたようである。

第２節　その他の遺構

古墳の墳丘および周溝以外の遺構としては、ピット４基、土坑１基を検出した。以下、これの遺構についての報告を行う（第５・７図、図版第３）。

Ｐ１は、調査区の東端に位置する。約半分が調査区外に延びているためはっきりしないが、平面形は楕円形と考えられる。検出時、周溝と接しており、周溝と切り合い関係にあることが判明していた。土層観察の結果、周溝によって切られていることが明らかとなり、古墳構築以前の遺構であることが判明した。底面は西側で深くなっており、壁は緩やかに立ち上がる。検出範囲での規模は、直径0.7m、深さ0.25mを測る。内部には、地山ブロックを多く含む赤褐色シルトが堆積していた。遺物は出土しなかった。

Ｐ２は、調査区の東側、周溝外の平坦面からやや下降した斜面部分で検出した。この斜面は、先ほどの尾根筋の斜面ではなく、この部分に設置されている電柱を立てる際に掘削された撹乱であると思われる。よって、平面形としてはほぼ円形を保っているが、断面図のように南側は上半部を失っている。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦に作られている。規模は、直径0.78m、深さ0.46mを測る。内部には、地山ブロックを多く含む赤褐色シルトが堆積していた。遺物が出土しなかったため、時期は不明であり、古墳との関係ははっきりとしない。



第７図　ピットおよび土坑土層図（縮尺1/40）

Ｐ３は、調査区西側に位置する。周溝に近接しているが、切り合いは認められない。平面形は円形である。底面は中央部に平坦面が作られているが、全体としては皿状になっている。規模は、直径0.7m、深さは0.22mを測る。内部には炭化物を多く含む赤褐色シルトが堆積していた。炭化物は、比較的大きな炭が含まれていた。ただし、内部で火を焚いていたような痕跡は確認できなかった。遺物は出土していない。このピットについても、古墳との時期関係は不明である。

Ｐ４は、調査区の西端に位置する。平面形は円形である。底面は南側が深く掘り込まれており、平坦面が作られている。規模は、直径0.74m、深さ0.2mを測る。遺物は出土していない。堆積は柱穴状を呈しているが、有機物等は検出されなかった。このピットについても、古墳との時期関係は不明である。

ＳＫ１は、調査区の西側に位置する。墳丘裾部を掘り込んで構築されている。調査範囲外に遺構が延びているため全形は不明であるが、検出範囲での平面形は、ややいびつな方形である。周溝下層上面から掘り込まれている。底部は中央が１段低く掘り窪められていた。墳丘側の壁はほぼ垂直に立ち上がるが、周溝側ははっきりとしない。底部の段差付近には長方形の石が１石置かれていた。特に使用痕跡は認められない。内部は、上層に墳丘盛土の流失土が堆積しており、下層には炭化物や焼土を含む赤褐色砂が堆積していた。また、甕と思われる土師器片が下層から出土している。

以上の点を考慮すると、この土坑は、周溝がある程度埋まった古代の段階で構築されており、古代に属する遺構であると思われる。本遺構の機能や性格については不明といわざるを得ないが、人的活動の痕跡は神社の成立につながる有力な根拠であるといえる。

第４章　遺物

今回の調査では、コンテナバット２箱の遺物が出土した。出土遺物の大半は、古代の須恵器・土師器が中心で、古墳に伴う遺物は極めて限られている。また、古墳時代以前の石器や特殊な土製品が出土した。以下に詳細を述べる。なお、土器については周溝からの出土品である。

第１節　土器および土製品

須恵器（第８図、図版第５）　１は、高坏蓋である。つまみから天井部までしか残存していない。つまみは扁平で、突起はない。焼成はやや不良で、乳白色を呈し、胎土も粗い。色調その他に関しても、２～８までの製品とは明らかに異なる。ＴＫ10型式併行期以降に属する可能性がある。

２は、坏蓋または壺蓋である。つまみを欠損しており、小片のため、どちらとも判断し難い。しかしながら、かえりが非常に短いので、坏蓋の可能性が高い。復元口径は11㎝である。灰色で、焼成は良好である。古墳時代終末期から古代初頭に属する。３も坏蓋である。つまみを欠損する。口縁から天井まで扁平な形態で、口縁が短く立ち上がる。復元口径は14.8cmである。黄灰色で、焼成は良好である。

４～８は坏身である。４は、底部と体部の境にわずかに段差がある。体部上半を欠損しているため、断定は不可能だが、胎土は１によく似ており、本例も古墳時代に属する可能性が高い。

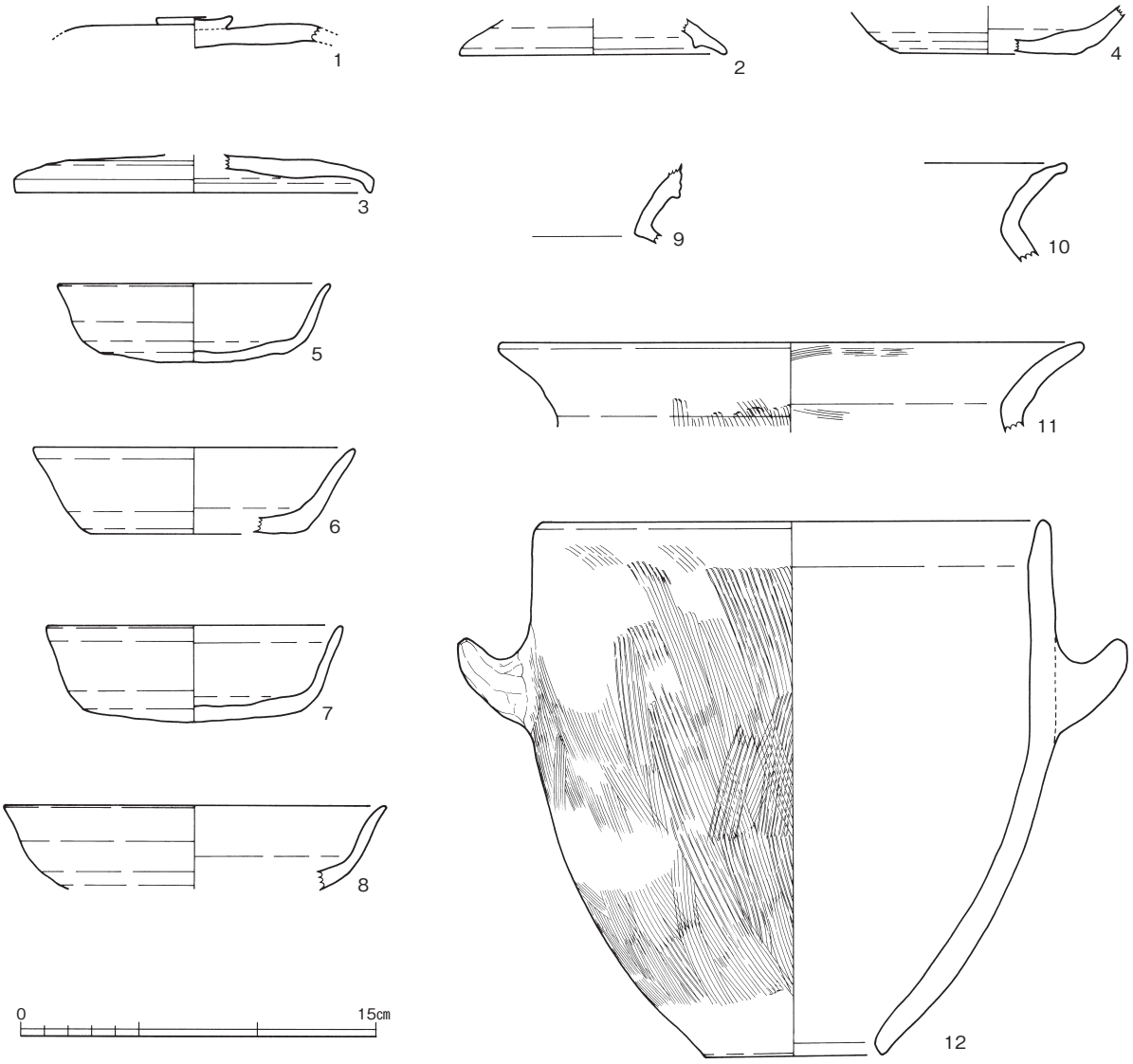
５～８はいわゆる坏Ａである。５は、口縁付近でわずかに外反する。底部は少し丸みを持つ。口径は11.2㎝、器高は3.3㎝である。底部内面は、ナデ調整後、不整方向のナデ調整が施されている。灰色で、焼成は良好である。６は、口縁部が直線的に伸びる。底部を欠損するが、口径13.2㎝、器高3.6㎝に復元できる。灰色で、焼成は良好である。７も口縁部が直線的に伸びる。口径は12.2㎝、器高は４㎝である。灰色で、焼成は良好である。８は口径が15.8㎝と他の坏よりやや大きい。口縁部と底部の境が丸みをもつ。灰白色で、焼成は良好である。

土師器（第８図、図版第５）　土師器は破片資料が多く、器形を復元しうる個体が少ない。丘陵上で埋没していたため、土器表面は風化が強く、大半の資料は残存状態が良くない。ただし、大半がハケ調整の確認できる資料であり、煤が付着する例が多い。以下、図化できた資料について報告を行う。

９は、月影式系甕である。小片のため、口径は復元できない。口縁帯に擬凹線文が施される。口縁部上端を欠損するが、３条残存している。体部内面頸部以下はヘラケズリ調整であるが、それ以外は、ナデ調整で仕上げられている。橙色を呈し、焼成は良好である。

10・11は甕である。10は、緩やかに屈曲する口縁部をもち、口縁端部はわずかに外反する。端部は丸く仕上げられる。口縁部外面に煤が付着する。小片で口径の復元は不可能である。焼成は良好で、橙色を呈す。11は、口縁部が緩やかに大きく開く。口縁端部は丸く仕上げられる。口縁部内面には、ハケ調整の痕跡が認められる。口縁部外面はナデ調整、胴部はハケ調整である。口径は24.2㎝で、おそらく長胴の甕であろう。焼成は良好で、橙色を呈す。

12は甑である。同一個体と推定される１個体分の破片が出土しているが、接合点が確認できないため、図上で復元を行った。口縁部はほぼ直立し、口縁端部は丸く仕上げられる。口縁部内面には、内傾面が作り出されている。底部は閉じられることなく、単孔になっている。外面はハケ調整で、口縁部および底部から一定の範囲はナデ調整されている。内面は丁寧なナデ調整である。



第８図　土器実測図（縮尺1/3）

土製品（第９図、図版第６）　Ｂ区の周溝上層から出土した。塼仏形の土製品である。表面が炭素吸着により黒色化しており、須恵質というより瓦質に近い。いずれにしても窯で焼成されていることは間違いない。図化できる部分を２点掲載した。接合点がないため、側面線を合わせた状態で図化を行った。

方形の本体の上に、仏像が浮き彫りされている。上の破片は、本体の横幅は3.6㎝で、残存部の長さは5.4㎝である。本体背面には、指紋がはっきりと残る圧痕が複数残っており、型押しされていることは明らかである。側面にはケズリ痕が確認できる。光背より上部は削られており、上端にむかって細くなる。残っている破片の中では胸の表現部分がもっとも分厚く1.5㎝の厚さがある。

光背は火焔形を表している。頭部に宝冠を冠していると思われる表現がある。顔から肩までは欠損する。胴体は左半身の表現が残存しており、左手は手のひらを正面にむけている。左手の下、わき腹部分には、はっきりしないものの衣を着ているような表現がある。

こうした表現から推定すると、菩薩像あるいは明王像と考えられる。しかし、欠損部分が余りにも多く、不確定である。また、推定される顔の中心線と胴の中心が一致しないため、あるいは下の破片がＬ字形に折れ曲がる可能性も残されている。

第９図　土製品実測図（縮尺1/2）

問題となるのは、本土製品の時期である。周溝上層からは中近世の遺物は出土しておらず、周溝上層埋土からは古代の土器類しか出土していない。しかし、古代においては、類似例を見出すことはできない。

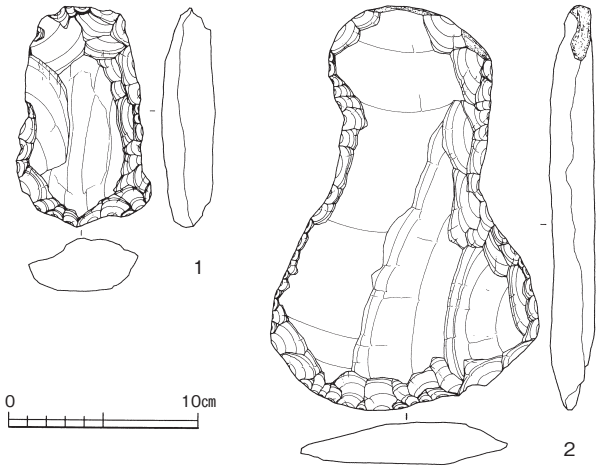
飛鳥時代以降の塼仏の例において、本品に最も類似するのは、小型方形の独尊仏である。しかし、現在までの出土例において、本例と共通する類例は見出しがたい。特に、火焔形光背の表現がまったく異なる。通有の火焔形光背は、山形や心葉形の縁辺に火焔が細かく突起した波のように表現されている。本例では、ひとつひとつが揺らめく炎のように、表現されている。以上のようなことから、現在のところ、古代に属する可能性があるものの、時期不明といわざるを得ない。ちなみ県内では武生市王子保窯で塼仏が出土しているが、三尊仏であり、形態も本例とはまったく異なっている。

式内社の多くは、国家仏教の広がりと共に、神仏習合の流れにのみこまれ、その影響を色濃く反映した性格を有することが明らかであるが、あるいは本例もこれに係るものであるのかもしれない。

第２節　石器

石器は５点で少量である。内訳は、安山岩製の打製石斧２点と磨石１点、チャート製で小形の剥片が２点である。周溝および表土から散在して出土した。

打製石斧（第10図、図版第６）　１と２は打製石斧で、共に周辺に調整される。１は、基部から刃部へ側辺が緩く開き、撥形を呈す。２は分銅形を呈す。側辺下半が大きく湾曲して開き、幅広の刃部をもつ。側辺中程のやや上位に抉入をもつが、左右の側辺で抉入部位が若干ずれる。



第10図　石器実測図（縮尺1/4）

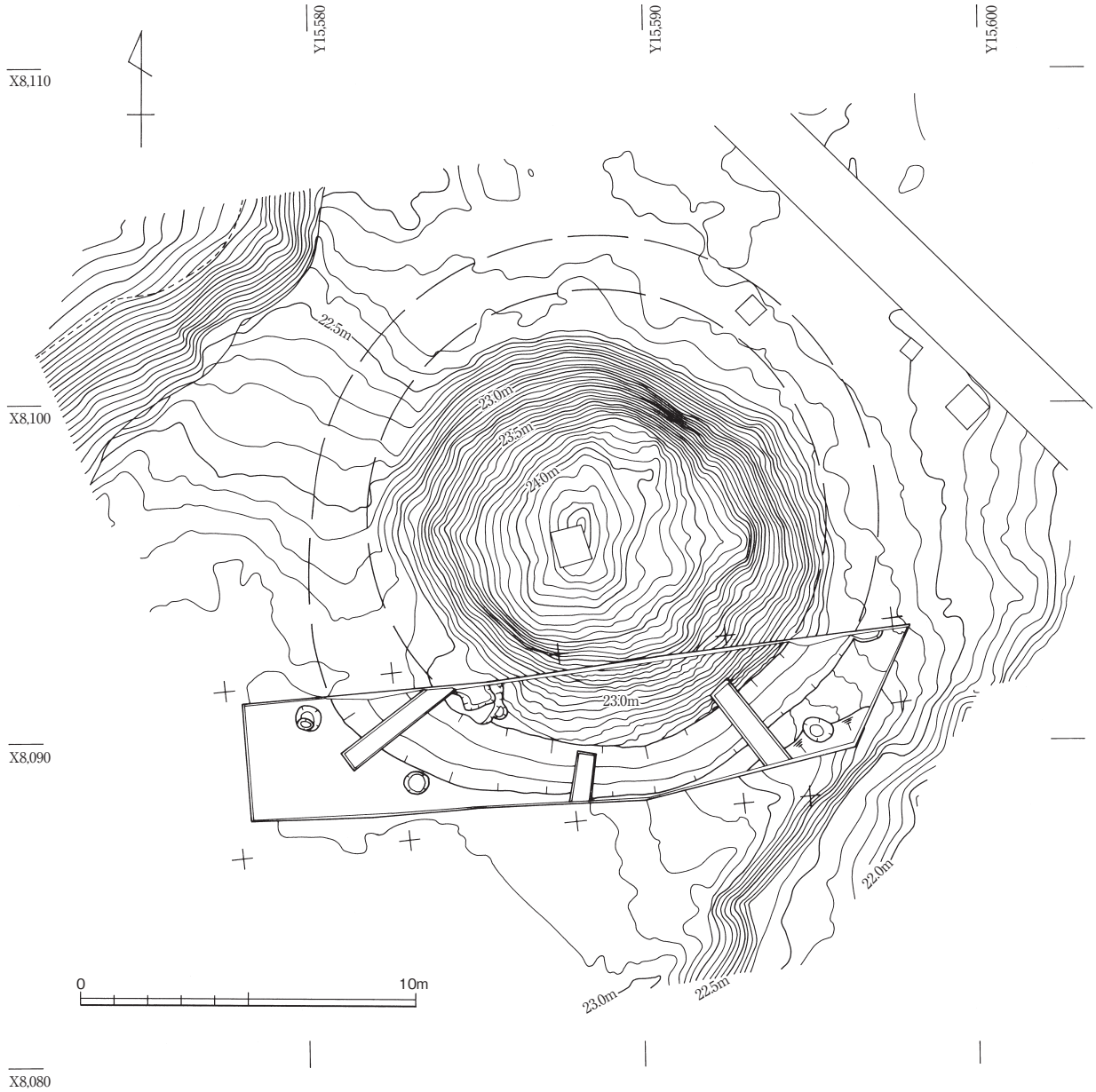
第５章　まとめ

以上のような調査報告のとおり、本古墳は古墳時代後期の円墳である可能性が高く、また、式内社とされているように、古代においても利用されていることが明らかとなった。最後に、今後検討すべき問題等にふれながらまとめとしたい。

第１節　下市古墳について

調査の結果、下市古墳は周溝を伴う円墳であり、墳丘の直径は12.8m、周溝の外周直径は15.6mの規模であることが明らかとなった。また、周溝は全周している可能性が高い。こうした調査成果をもとに周溝と墳丘を復元したものが第11図である。

墳丘西側では、ＳＫ１等の遺構に見られるように、古代の段階で改変されている可能性もある。



第11図　下市古墳復元図（縮尺1/200）

しかし、周溝外縁側は撹乱を受けている要素は確認できなかったので、もとからやや膨らむ形態であったと推定し、復元を行った。完全な円形ではないが、独立尾根や山麓に展開する後期古墳において、このようにととのった円墳は数少ない。

日野川・九頭竜川左岸地域において、まとまった古墳群の調査事例としては、本古墳から３㎞下流に位置する、福井市江上町にある漆谷遺跡、法土寺遺跡がある。両遺跡合わせて横穴式石室を埋葬施設とする円墳が21基確認されている。墳丘規模は11～16mと本古墳とあまり変わらない規模であるが、丘陵斜面に立地しているためか、周溝が全周している古墳は確認されていない。また、墳形も円墳とはいえ、下市古墳のようにほぼ正円形に築造された古墳はない。このような事例からも、本古墳はやや特異な印象を受ける古墳であり、こうした性格は、立地している神社や周辺の環境とも関係しているものと推定する。

第２節　下市古墳と與須奈神社

本古墳の位置する與須奈神社が式内社であることは、繰り返し述べてきたが、その内容について、検討しておきたい。

いわゆる『延喜式神名帳』に記載された式内社には、廃絶・復興・合祀といった事情により、その位置がいまだ論議の対象となることが多いが、幸い本社に関してはそのような問題はない。また、今回の調査によって、８世紀以降には確実に何らかの人的活動が行われていたこともそれを裏付けるものである。特に、出土品に甑が含まれていたことは重要である。日々の食事ではなく、いわゆる神饌の調理の可能性も考えられる。

また、本社は、『延喜式神名帳』によると「大己貴命　合　少彦名命、繼體天皇、大山祇命、稚子媛」という祭神で構成されている。特に、継体大王の妃の一人である稚子媛を祭神としている式内社は、県内には本社しかない。記紀によると、稚子媛は三尾角折君の妹とされており、三尾氏の出自とされる。本社の対岸には、角折町が存在し、三尾氏とかかわりが深い土地柄であることは既に指摘されている。この一帯が三尾氏の氏族集団の勢力範囲として、少なくとも古代以降支配下にあったことは想像に難くない。

そして、それが下市古墳の築造時期、おそらく６世紀の前半代にまで起源を遡らせる可能性があることを、古墳の存在は示していると思われる。その時期はまぎれもなく継体大王の即位後の時期である。

発掘調査自体は非常に小規模ではあったが、そこから発見された事実は小さくはない。今後、周辺調査の進展によって、こうした問題が検討されることを期待してまとめとしたい。

参考文献

式内社研究会編『式内社調査報告』15　1979　皇學館大學出版部
『福井県史　通史編１　原始・古代』1993　福井県

写　真　図　版

（1）古墳遠景（南東より）

（2）調査前全景（西より）

（1）周溝内堆積状況（西より）

（2）墳丘および周溝堆積状況（西より）

（1）ＳＫ１土層堆積状況（南東より）

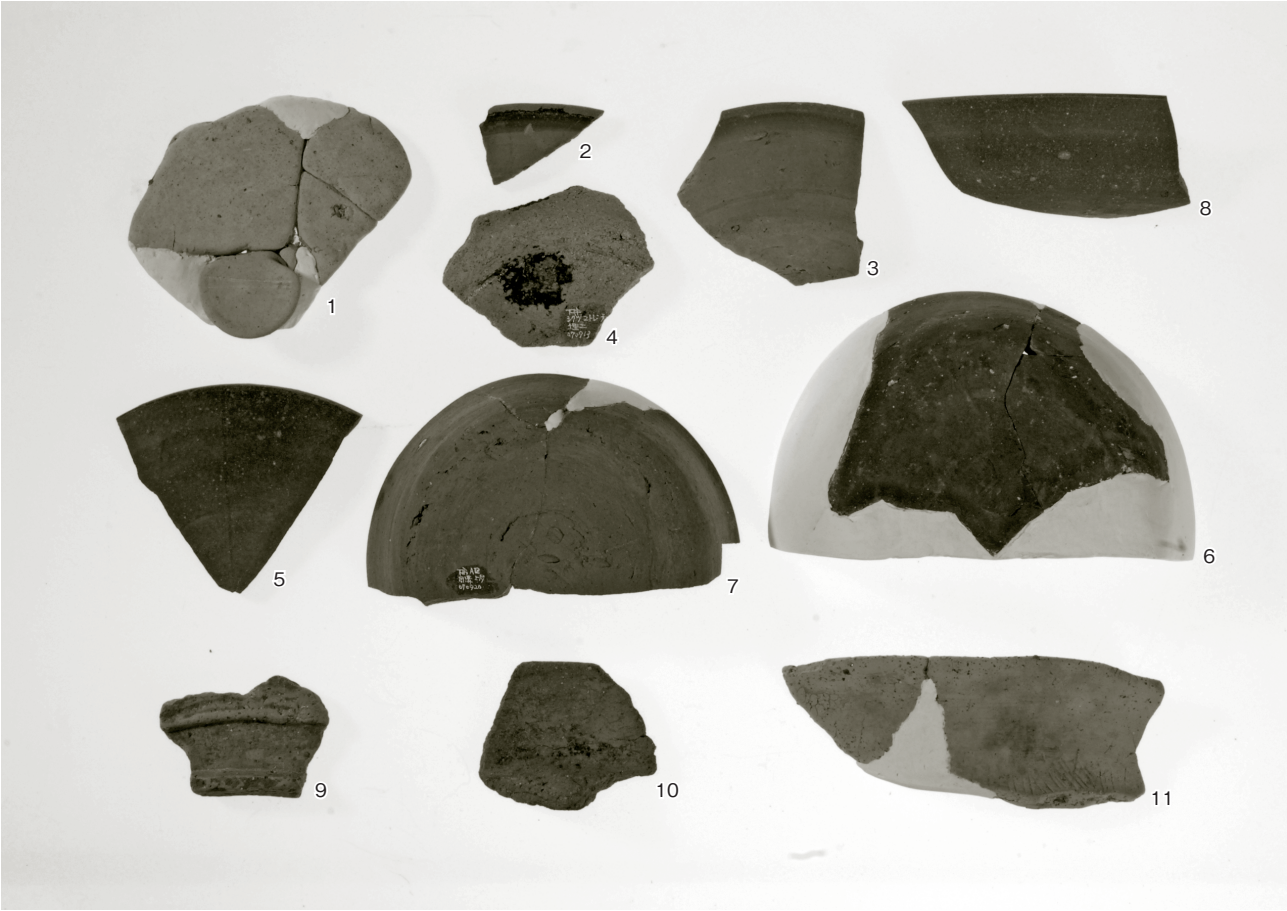
（2）墳丘および周溝（西より）

図版第四　遺構

（1）墳丘および周溝（南西より）

（2）墳丘断ち割り状況（西より）

図版第五　遺物　土器



（1）須恵器・土師器

（2）甑

図版第六　遺物　土製品　石器

（1）塼仏（表面）

（2）塼仏（裏面）

（3）打製石斧・剥片

報　告　書　抄　録

ふりがな	しもいちこふん
書名	下市古墳
副書名	一般県道殿下福井線道路改良工事に伴う調査
巻次	
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第116集
編著者名	宮崎　認　田中勝之
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所在地	〒910-2152　福井県福井市安波賀町４-10　　TEL　0776-41-3644
発行年月日	西暦2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
しもいちこふん 下市古墳	ふくいけんふくいし 福井県福井市 しもいちちょう 下市町37-36	18201	01122	36° 4′ 22″	136° 10′ 22″	20070910 ～ 20071005	70	道路改良工事（一般県道殿下福井線）に伴う発掘調査

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下市古墳	古墳	古墳　古代	周溝 土坑１基	須恵器・土師器・土製品・石器	６世紀前半に構築されたことが判明した。 古代の遺構も確認された。

要約	下市古墳は、これまで築造時期など詳細は不明であったが、６世紀前半代に構築された円墳であることが確定した。また、周溝が完全に埋没する前の古代の段階で、周囲を利用されていることも判明した。古墳が位置する尾根は式内社であるが、その縁起の通り、すでに古代の段階で神社として利用されていた可能性が高くなった。

福井県埋蔵文化財調査報告　第116集

下　市　古　墳

― 一般県道殿下福井線道路改良工事に伴う調査 ―

平成22年３月15日　印刷

平成22年３月31日　発行

発行　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒910-2152　福井市安波賀町４-10

印刷　株式会社　松浦印刷所

〒912-0022　大野市陽明町２-401